

# 院本『八百屋お七江戸繁』の存在

紀海音の作で『八百屋お七』の前編  
この正本が解く 操史上の新事實

「操」の研究に没頭してから、久しい大阪住居、大阪で見られ得るだけの院本は公私の文庫を初め、借覽或は蒐集を續けた。ところが、去年の秋、上京してから、東大と京大の若い學徒で、特に紀海音を研究されてゐる方から、異口同音に大阪府立圖書館所藏の『八百屋お七』は、紀海音の作と見ていいか、どうかとの質問を受けた。勿論海音の作に間違ひはなからうと私は答へたがよく々訊すと、私が考へてゐる紀海音の『八百屋お七』以外に、大阪圖書館に私の氣付かなかつた『八百屋お七江戸紫』といふ三段物の淨るりがあるのであつた。

私が大阪在住の折に、圖書館の目録を窺目した時には、『八百屋お七江戸櫻』とのみ思込んでゐたが、實は『江戸紫』であつたのらしい。この話を若い方に、續いて二度教へられてから、半年といふもの『江戸紫』が頭にこびりついてゐた。

夏の休暇に入つたので、早速大阪へ歸つて、圖書館に、校友山村太郎君を訪ねて『江戸紫』を見る機會を與へられた。

紀海音作といふ『八百屋お七』には、共に刊記がなくして、『八百屋お七』と『八百屋お七戀紺櫻』といふ同文異題の二つの丸本が傳はつてゐる。そして興行年表を繰つてみると、

八百屋お七歌祭文

年代不詳

八百屋お七戀紺櫻二度目

享保十七年正月

といふのが、寶曆七年版の『外題年鑑』の所載である。然るところ、明和五年及安永八年版の『増補外題年鑑』では、

八百屋お七歌祭文

元祿(四月に寶永と改元)十七年一月

八百屋お七戀紺櫻二度目

享保十七年正月

となつてをり、寛政五年版の『外題年鑑』では、『戀紺櫻』の方の「二度目」の三字が削られてゐる。

そしてもう一つ享保二年十月江戸伊豆屋勘左衛門板で、竹本喜世太夫正本の『八百屋お七戀紺櫻』作者紀海音といふのが傳つてゐるとの事である。これは故黒木勘藏氏が『淨るり名作集』に記されてゐるが、私は喜世太夫の正本は知らないが、黒木氏の解説によれば、上方の版と「殆んど同文」であるとある。

院本「八百屋お七江戸紫」の存在

すると、問題は『八百屋お七』『八百屋お七戀紛櫻』（上方版も）江戸版もの三つの丸本は同一の作で紀海音の作だと認めてよかりさうだ。が、寶永元年二月上演の『八百屋お七歌祭文』は、どうなのかといふに、黒木勘藏氏は、内容は同一であるまいと疑ひを存せられ、又寶永元年二月の上演年代にも疑問を投げられた。水谷不倒氏は、『歌祭文』も『八百屋お七』も『戀紛櫻』と外題だけは、その時々の變更で、内容は同一だらうと言はれてゐる。（『世話淨るり大全』の解説）

が、按ふに、元來海音の『お七』は、西鶴の『五人女』と、當時流行の歌祭文『戀のもえぐる』などから構想された院本だから、恐らく、寶永元年二月（？）の『歌祭文』が第一次の初演で『操年代記』に謂ふところの『東岸居士』の切淨るりに出たものではあるまいか。そしてまだ基礎の定らない豊竹座の事だから正本は刊行されなかつたのであらう。或は『八百屋お七』として刊したのかも知れぬ。そして竹本喜世太夫が江戸へ下つた時は、享保の初年だと思はれるから、喜世太夫は、この時既に竹本座を脱して豊竹座へ入り、古例を破つて豊竹座の舞臺へ、竹本喜世太夫で出座してゐるから、江戸下りに江戸題材の『八百屋お七』を提起て江戸お目見得をしたのだらう。そしてこの喜世太夫の江戸興行は竹田次郎五郎といふが「手づま人形」で舞臺を勤めたとある。

元來喜世太夫は、初代竹本義太夫の直弟子で、正徳元年筑後掾最初の段物集『鸚鵡が査』の門弟次第には、高弟竹本頼母の次席に坐つてゐるが、正徳四年筑後掾が死んだ時の門弟連名（竹のふるみち）には、もう名前が見えない。そして享保三年正月の豊竹座の『鎌倉三代記』（紀海音作）で、豊竹上野少掾のワキを語つてゐる。その前年の享保二年十月には、前記の人形竹田次郎五郎と共に江戸下りをやつてたものらしい。

もう一つこゝに操史上に最大の注意を拂はねばならぬ事は、この享保三年の正月の『鎌倉三代記』では、三味線を竹澤權右衛門が彈いてゐる。權右衛門といへば、井上播磨掾の弟子で、後三味線に肩替りをして、竹本義太夫が未だ清水理太夫時代からの合三味線で、理太夫が竹本義太夫を名乗つて貞享元年に竹本座の櫓を道頓堀に揚げた時からの竹本座の元老である。三味線の總帥である。そして當流淨るりの創始には、義太夫に協力した人だ。その權右衛門が、老後に、筑後掾の歿後に、その對立してゐる豊竹座に投じて、喜世（或は「代」）太夫と共に、新たに上野少掾と受領した豊竹若太夫の舞臺に立つて立三味線を彈いてゐるのである。

この事實は、今まで案外淨るり史家の注意を引いてゐないが、竹豊兩座の對立といふ事よりも、當流淨るりの曲風の一變といふ事に重大な關係が存するのである。即ちこの享保三年のこの

『鎌倉三代記』上演より遡つて四年前の正徳五年十一月の竹本座の『國性爺合戦』が、後の二代義太夫、當時の竹本政太夫が、當流淨るりに曲風の一變を將來し政太夫が、自己の信する當流淨るりを樹立完成した時であつて、そしてその時の合三味線は、鶴澤三三一、後の初代鶴澤友次郎であつた。即ち從來の初代義太夫の謂ふところの「當流」の合三味線を捨て、新進の二二の力を藉りて政太夫は、「政太夫風の當流」を創始したのである。そして權右衛門は却つて、當流を去つて若太夫の「東風」に投じたのである。こは淨るりの曲風の上に重大な關係を持つと推定さるゝ竹豊兩座の人事行政上の事實である。竹澤權右衛門はこの『鎌倉三代記』以外にも、紀海音の『坂上田村麿』に壹代太夫と共に出演してゐる畫證がある。

かう見て來ると紀海音の『八百屋お七』は、西鶴の『好色五人女』と流行の歌祭文とに素材をとつて、寶永元年及び享保十七年と、大阪では二度上演し、江戸では享保二年に上演したといふ事になる。

ところが、こゝにこれらの『お七』に先行した書卸しだあるが、大阪では上演されず、江戸で上演されたものだと考定さるゝのが、こゝに掲出した『八百屋お七江戸紫』である。

『八百屋お七江戸紫』三段續

を見ると題簽に

堺島太夫

正本

竹本喜世太夫

正本

とある。その他の太夫では竹本茂太夫、同半太夫、同淺太夫の名がある。奥付には

享保四己亥八月吉日

とあり、

江戸湯島天神女坂

さがみや與兵衛

が、「竹本一流草指正本所」となつてゐる。尙奥付には

手妻太夫

辰松八郎  
辰松幸助  
辰松兵衛座  
辰松三十郎

作者  
辰松の海音

とある。

院本「八百屋お七江戸紫」の存在

そしてこの『江戸紫』では、外題に唄つてある八百屋お七が、顔さへも出さないで、この淨るりの三段つゝきは終つてゐる。

この『江戸紫』は、「近江の一城の主花園の一子梅太郎」が、大殿の勘氣を蒙つてゐる。九條島原の馴染の太夫が廊の意地から人手に落籍されようとするから、梅太郎のために金の工面をする家來の安盛源二兵衛が、高野聖を殺して金を盗つて梅太郎へ届けようとするのを、見つけられて敵方に追詰められる。その時源二兵衛の臣下の十内といふ者、主人源二兵衛の一子吉三郎をゆかりの者とあつて、武藏國吉祥院へ父の菩提のため、落しやる。源二兵衛は若殿のために腹切る。敵方の策動がいろいろあるといふ風な、近江の大名花園家のお家騒動で、三段つゝきで、藝題のお七は出ないが形式は調つて終つてゐる。

この淨るりが、八百屋お七に關係あるとすると、江戸へ落された吉三郎と、後にお七との戀が生れるのであらうと想像さるゝが、「江戸紫」では、そこまで筋が展開してゐない。

### 『八百屋お七戀絆櫻』三段續

の方を見ると、上巻の切場、玉子酒の條りで、戸倉十内が出て来て、吉三郎を切諫する。その言

葉に、

主人源二兵衛。浪人せしは何故とお耳へ入りしは知らねども自分に於て一合も非道の行爲は致さねども、若殿の御難儀を救ひ申さん爲ばかり、私慾の科を身に被り不時の虚名を受けたる事——（十内の詞）

父源二兵衛若殿への忠義に浪人致せしを若殿御満足に思召し御身持直れば浪人せし甲斐あらん然れども此趣大殿御存じなき時は親たる人徒奉公——（吉三郎の詞）

とある。その外戸倉十内が、源二兵衛の骨桶を差上げての苦諫の文句が、『江戸紫』の趣向、筋が分らないと全く意味をなさない。即ちこの『戀紺櫻』の上巻の玉子酒の條は、實は八百屋お七の淨るりとしては贊物である。吉三郎の前身、素性を看客に知らすには、これだけでは不足であり親源二兵衛云々の文句も『江戸紫』がないと利いて來ないのであるが、實際上の上演淨るりとしては往々にして存する淨るりの不統一と今日までは、私共は考へてゐた。言葉を換へると、戸倉十内なる人物が顔を出さず、玉子酒の條りが他の方法で結びつくと、紀海音の『お七』は、もつと世話物として纏つた作品になるのであると考へられた。——恰も近松の晩年の世話物なる『心中寄庚申』の上の巻が全く贊物であり、一曲としては不統一の結果を見せてゐるのと同じであ

る。

然るところ、今私はこの『江戸紫』を読むに至つて初めて了解したのである。海音は、お七を題材にして淨るりを構想するに當り、まづ『江戸紫』に筆を染めて出來上つたが、五段組織にもならず、三段では纏らず、遂に別に三段の世話物の形式を探つて『江戸紫』を捨てざるをえなくなつたので、これを捨てゝ別に『八百屋お七』を、寶永元年に書卸したのであらう。そして、吉三郎の一條が、尙その作中に蒂の如くに殘存して、「玉子酒」の條をなしたのであらう。そしてソレを『八百屋お七歌祭文』の外題で上演した。二度目の上演には『八百屋お七戀絆櫻』と改題して上演したものだらう。が、豊竹座では遂にお七の前編『江戸紫』は手摺にかゝらずに、海音はこの『江戸紫』は筐底に秘してゐた。

### 辰松八郎兵衛座

ところが、寶永元年一月のお七の後編『八百屋お七歌祭文』を名残にして、豊竹座の稽は退轉した。この點は、後に關係があるから注意を要する。

そして寶永三年暮に『操年代記』の作者一風の言葉を借れば河内屋加兵衛なる「粹方」即ち興

行師が豊竹座の再興に一臂の力を貸し、「豊竹」、「辰松」を相座本として、再度の櫓を舉げた。河内屋加兵衛の再興案は、若太夫の淨るりに加ふるに、作者紀海音と、おやま人形の辰松八郎兵衛の表看板で、豊竹座の基礎を築かうとするにあつた。

こゝで考へねばならぬのは、辰松派のおやま人形は、突込人形の形式の人形様式だ。豊竹座が主として採り來つた人形様式は片手人形派の藤井小三郎、津山介十郎などといふ人々であつた。されば加兵衛が竹本座の人氣人形の辰松八郎兵衛を拉し來つた寶永の初めの風は、突込人形に世間の好尚は向いてゐたらうが、元來突込人形は、道行、景事などの戸外の動作に最も恰好な人形様式であつたが、淨るりが、内容的に進歩し、細かい動作、屋内の立居が主となつてからは突込人形よりは片手人形様式に「人形」としての優れたる素質が、多分發見されて來た。かくて豊竹座と辰松八郎兵衛との關係は、この人形舞臺の推移からして、河内屋加兵衛が考案した程の效果がなくなつて來た。一方竹本座では、逃がした鯉のやうに豊竹座の八郎兵衛が大きく見えた。故に八郎兵衛と豊竹座との關係は正徳三年頃まで續いたが、正徳五年竹本座の『國性爺合戦』には八郎兵衛は、元の古巣、竹本座へ歸つて錦祥女に、得意のおやま人形を遣つてゐる。

が、實は辰松八郎兵衛時代は、もうとつくに去つた。——といふより突込人形の時代は徂つた

院本「八百屋お七江戸紫」の存在

のである。そして一方吉田文三郎、藤井小三郎、藤井小八郎などの片手人形の名手が、片手人形の人形機構上の工夫、演出上の細心なる案出は、大まかな、人形の姿態の美しさのみが主眼となつてゐる突込人形では懽らくなつた。そして人形の魂の働きを示さうとする傾向を段々と帶びて來た竹本座の盟主若い二世義太夫——政太夫の淨るりは、内面的に、淨るりを戯曲的に立體的に描き出さうとして、意識して叙事的の淨るりに「戯曲の構成」を探らうとする傾向が見え出した。即ち政太夫の言葉を籍りると「東風の技巧で、西風の腹を語るのが淨るりの面目である」といふ意味の事を門人に教へてゐる。「西風の腹」——「當流の腹」はとりも直さず院本の魂であるこの政太夫の主張は正徳五年十一月の『國性爺合戦』で大成されてゐる。即ち淨るりの組織が、こゝに完成されたのである。これを人形側からいふと突込人形の様式は、もう時代に後れた舊い手法で、この淨るりの新傾向に添ふ事の出來ない人形様式であつた。

斯くて、『國性爺合戦』大當りで、十七ヶ月の興行を續けたといふから、世は移り改元されて享保二年となつて、『國性爺』は終演した。恐らく、これを名譽の名残りとして、辰松八郎兵衛は竹本座をも去ると共に永久に大阪の藝壇を去つたのである。享保の初め江戸へ下つたと傳へるのであるから。

ところが、辰松八郎兵衛の江戸の行動が今まで全く傳はらなかつた。辰松八郎兵衛が江戸で知られてゐる動きは、嘗て前島春三氏が心付いて、その著『近代國文學の研究』で發表された如く、

享保三戌年十一月廿五日

於二丸辰松八郎兵衛操御見物 公方様にも被爲成二丸勤番御小姓組拜見（續談海）

享保十九寅年五月九日

辰松八郎兵衛病死十日とむらひ（市川柏筵の『老の樂』）

の二件である。即ち八郎兵衛は享保三年十一月頃には、確かに江戸にゐた事と、從來『名人忌辰錄』によつて誤られてゐた八郎兵衛の歿年の寛延三年十一月廿四日といふ事が訂正されたばかりであつた。

### 『江戸紫』が教へる事實

が、私はこの『江戸紫』の刊記によつて、

(一) 享保四年八月に辰松八郎兵衛座が、江戸で興行してゐた事。

院本「八百屋お七江戸紫」の存在

(一)その辰松座と共に、江戸へ下つた太夫は、初代竹本島太夫であつた事。

(三)寶永元年一月に豊竹座が、退轉した時の『八百屋お七』の『歌祭文』は『戀紺櫻』と同一であつた事。

(四)その『お七』の前編が、海音の筐底にある事を知つてゐた、そして當時退轉の直後に相座本となつた辰松座の八郎兵衛の子(?)の辰松幸助が、江戸下りに、その前々年に既に竹本喜代太夫によつて、『戀紺櫻』は上演されてゐたから、目新しい江戸題材の『お七』の前編『江戸紫』を海音に乞ひ受け作者の班に幸助自らも署名して、江戸で上演し、且つ正本の刊行を見た事。

(五)「手妻太夫」といふ意義の事。

の五點を發見する事が出來た。これ等の點について少しぬけておこう。

(一)辰松は、江戸へ下つて、前島氏が示された如く、享保三年十一月、二の丸で、操を臺覽に供した。そして享保四年十一月品川御殿山で操興行をして『西行法師墨染櫻』を上演した。(三)田村萬魚氏の「藝術殿」所載昭和七年六月號)この『墨染櫻』の前に『江戸紫』が上演されてゐる事、この丸本で明かであるから、これも恐らく御殿山の興行であつたらうと思ふ。そして辰松座は、延享二年には、江戸葺屋町で、辰松八郎兵衛座本で操興行をしてゐる。が、この時はもう初

代八郎兵衛は、前記の如く、享保十九年五月九日に死んでゐるから、この八郎兵衛は、二代の八郎兵衛である。二代目は誰が襲名したのであるかといふに、辰松幸助が二代を繼いだ。が、延享二年には八郎兵衛といふと故人と紛らしから。寧ろ今八郎兵衛を、賣込んだ舊名の「幸助」で評しておかうといふ意味の事を、延享三年二月の操評判記『音曲猿轡』に書いてゐるから、延享の初めに、幸助は一代を相續したものだと考定される。かう見ると『名人忌辰錄』にいふ寛延三年十一月廿四日に歿した辰松八郎兵衛とは二代の八郎兵衛で、即ち幸助ではあるまいかと疑ひを存しておく。

(二)『江戸繁』によるとこの正本は堺島太夫とあるのは、竹本島太夫で、彼は泉州堺我島の産故に島太夫と號した。後ち寛延元年に、竹本此太夫と共に、人形の吉田文三郎と衝突し、『忠臣藏』の書卸しに竹本座を去つて、豊竹座へ行き、豊竹島太夫となつた太夫であるが、恐らく八郎兵衛と共に江戸へ下つて、竹本一流の正本を刊行するに當つて、當流への遠慮から、江戸では、郷國を名乗つて、堺島太夫と言つてゐたものであらう。されば、『操年代記』に島太夫が『江戸から達つて頼まれて己の年(享保十年)江戸に下り、續いて午(十一年)未(十二年)と江戸を勤めた』とあるのは、享保四年に辰松座で江戸下りをしてゐる事を裏書するものだと考へていゝ。

(三)と(四)とは聯闇して言へる。紀海音に『八百屋お七』とその前編未発表の作品がある事を知つてゐた、當時相座本になつてゐた辰松が、この作を江戸下りの土産新作とした事は當然の事であつて、この時に島太夫の二枚目を語つてゐるのが、『戀紛櫻』を既に江戸で、享保二年に語つた喜代太夫であるから、『歌祭文』が、萬一、これらの『お七』と違つてゐるものであつたらば、『歌祭文』を土産にするのが當然ではあるまいか。『江戸紫』はお七の淨るりとしては、未完の作品であるのを上演したところに、他に『歌祭文』といふお七の淨るりのなかつた事を物語つてゐるのであるまいか。

(五)の問題は、人形様式としては、相當重大なる暗示が含まれてゐる。從來「手妻」といふ言葉に、一種の常識的の意義を持つた考へ方をした。「手妻」の言葉に「品玉」といつた風な想像を加へて考へてゐた。そして手妻人形、或は手祥人形などいつて、主として或は限つて、山本飛驒掾の人形を「手妻人形」と稱へて來た。故に飛驒の人形には、片手人形、手妻人形、碁盤人形の三つの名稱を傳へる。解する者は、片手人形とは背後から手をさし入れて遣ふ手遣ひの人形であり、手妻人形とはゼンマイ仕掛け、外形は片手人形と同一である。胎内はゼンマイ仕掛けである。この手妻人形を碁盤に載せて使ふ場合に碁盤人形といふ風に、吾れ人共に解してゐた。が、私は

この『江戸繁』の辰松八郎兵衛座の頭に『手妻太夫』の四字を見て、『手妻』の持つ概念に變更を來たさねばならぬと考へる。

即ち山本飛驒掾の片手人形は、近松の「重井筒」に述べるが如く「包む袂の飛驒掾ふたつ遣ひの手づまにも」とある如く、片手に一個づゝを遣つた人形であつた。そしてソレを手妻人形とも稱へた。これを座敷藝として碁盤を臺として遣ふ時には、碁盤人形とも稱へた。要するに飛驒の人形は二つ遣ひであつた。そして片手といひ手妻といひ碁盤といふも共に手遣ひで同一の人形の異名である。この二つ遣ひの片手人形の稍々發達したのが、藤井小八郎、藤井小三郎、近本九八郎一派の片手人形で、これは二つ遣ひでなく、飛驒の片手人形を一つ、一人で遣ふ形式であつたそしてこの發達した藤井小三郎一派の片手人形から三人遣ひが生れたので、飛驒を源流として、一工程を経て三人遣ひへと發達したものである。そして「手妻」に特種な例へば——ゼンマイ仕掛けとかいふ意味があるのでなく、「手妻」とは「操る」といふ位の概念しか認められないのが眞實に近いのではあるまいか。左れば突込人形の八郎兵衛も、人形様式の進歩から、大阪を追はれて江戸へ下つた時には、片手人形の様式をも舞臺に併用してゐる。これは、三田村氏が雑誌「藝術殿」に發表された畫證に就いてみると明瞭でもあり、又鳥居清倍の浮世繪に、突込人形であるべ

き辰松幸助が、片手人形の様式で、人形を遣つてゐる畫證があるのに見て明かだ。そして「手妻太夫」の「太夫」の意は、座本の意で「手妻太夫」は「操りの座本」といふほどの意であらうとこの『江戸紫』の奥付と、山本飛驒掾の正本などの用語例から心付くのである。

これを要するに、『江戸紫』の發見は、私に、紀海音の『お七』に前編のあつた事。ソノため『戀緋櫻』の玉子酒の條りが明瞭に解釋さるゝ事。そして「手妻太夫」の意味をハツキリと諒解さるるに至つたのである。

若い二人の學徒に、『江戸紫』の存在を示されて、『新口村』の孫右衛門の淨るりぢやないが『老足の休みく』私はこゝまで辿りついた事を欣ぶ。(昭和八、一〇、二二夜)



『紫戸江七お屋百八』 いな出の七お 作音海紀  
名連夫太と記刊のし返見紙表と丁一第一の

《『紫戸江七お屋百八』》

